天候不順に対応した水稲の管理対策（臨時号）

平成 31 年４月 10 日
新潟県農林水産部

〔要約〕

気象状況

◎　気象庁のエルニーニョ監視速報では、夏にかけてエルニーニョ現象が続く可能性が高いと発表されています。エルニーニョ現象が発生しているときは、夏期の気温が低く日照時間が少なくなる傾向があります。
◎　今冬は降雪量が少なく、消雪も早まっている状況です。

管理のポイント

◎　今後の気象情報に注意を払い、土づくり、健苗育成、適切な水管理など基本技術を励行し、良質な茎を早期に確保しましょう。
◎　水不足が予想される地域では、用水が有効に利用されるよう地域で話し合い、代かき・田植え作業を計画的に実施しましょう。

［予想される天候不順の影響］

○　気象庁のエルニーニョ監視速報（４月 10 日発表）では、現在エルニーニョ現象が続いているとみられ、今後、夏にかけてこの現象が続く可能性が高い（80 %）と発表されています。エルニーニョ現象が発生しているときは、夏期の気温が低く日照時間が少なくなる傾向があります。そのため、夏期の生育停滞等が懸念されます。
○　今冬は平年に比べて降雪量が少なく、消雪も早まっている状況です。そのため、今後の降水量によっては、代かき・田植え時期の水不足が心配されます。

［当面の管理対策］

○　土づくりは、後期栄養を確保し、安定した品質・収量を確保するうえで極めて重要です。過去の天候不順な年でも土づくりをしたほ場では、品質・収量の低下が少ない傾向があります。耕耘は、根の健全な発達を促すため、耕深[*1]15 cmを目標に行いましょう。また、ケイ酸質資材などの土づくり肥料を積極的に施用しましょう。
○　代かき・田植え時期の水不足に備え、かんがい施設等の点検・整備を行い、排水口や畦畔からの漏水防止に努めましょう。用水が有効に利用されるよう地域で話し合い、計画的に春作業を実施しましょう。
○　田植え後の保温的水管理は活着を促します。また、幼穂形成期[*2]頃は低温による不稔籾[*3]の発生を低減するため、深水管理が必要となる場合があります。水管理の効果が上

がるよう畦塗りや代かきは丁寧に行い、ほ場からの漏水を防止しましょう。

○　は種日は、健苗[*4]が必ず移植されるよう、育苗様式を踏まえて、移植予定日から遡って設定しましょう。

○　移植前追肥は、田植え後の活着を早める効果があります。田植え前４～５日頃に、箱当たり窒素成分で１～２ｇを追肥しましょう。

○　いもち病[*5]は、気温が低く日照が少ない気象条件で多く発生します。わたぼうしなどいもち病に弱い品種やいもち病が多く発生する地域では、育苗箱施用剤[*6]による防除を徹底しましょう。

○　栽植密度[*7]が低い場合、特に山間山沿い地など初期生育が確保しにくい地域・ほ場では、茎数不足が懸念されます。地域の情報を参考にして、品種の特性に応じた栽植密度で田植えを行いましょう。

○　早生品種は、生育期間が短いので、早期に目標の茎数を確保するよう５月上旬に田植えを行いましょう。コシヒカリは、５月 10 日以降が田植えの適期ですが、極端な遅植えは登熟気温が確保できなくなるので、移植の晩限を守りましょう。晩生品種は、出穂が遅れると登熟気温が確保できなくなるので、５月中旬までに田植えを行いましょう。田植えの適期は地域の情報を参考にして下さい。

○　田植え後はやや深水の保温的水管理とし、植え傷みを軽減しましょう。活着後は浅水にして水温の上昇を図り、分げつの[*8]発生を促すことで、良質な茎を早期に確保しましょう。

○　籾数が多いほど登熟期間中の低温や日照不足の影響を強く受けます。登熟を良好に進めるためには、過剰な生育を防止し、生育後半の稲体を健全に保つことが大切です。分げつの発生状況等を把握して、移植後１か月をめやすに、遅れずに中干し[*9]を開始するとともに、溝切り[*10]を確実に実施しましょう。

*1　耕深：田を耕す深さのこと。
*2　幼穂形成期：稲穂の元ができはじめる時期。穂が出る 24 日前頃にあたる。
*3　不稔籾：受粉障害で米が詰まっていない籾。
*4　健苗：茎が太く葉の色が濃く根張りの良い健康な苗。
*5　いもち病：稲に発生し、収量・品質を著しく低下させる病害。
*6　育苗箱施用剤：田植えの直前に育苗箱の苗に散布する農薬。
*7　栽植密度：苗を植える密度。平坦地では坪当たり 60～70 株、山間地では 70～80 株に調節する。
*8　分げつ：稲の根元から新しい茎が次々に伸びてくること。
*9　中干し：田の水を落として、一時的に田を乾かすこと。
*10 溝切り：水田内に８～10 条おきに 10cm 程度の深さの溝を切り、排水を速やかに行うこと。